

2015年(平成27年)  
3月30日 月曜日  
長崎新聞  
文化面

江戸時代のキリスト教禁制下、多くの教徒がひそかに信仰を守り続けたといわれる長崎・浦上地区。4度の「崩れ」(検挙事件)を経て、原爆投下で信徒1万2千人のうち約8500人が犠牲となった歴史を持つ。8日に長崎市で開かれた「第47回原爆文学研究会」で、恵泉女学園大(東京都)の篠崎美生子教授(日本近代文学)が、被爆医師の永井隆(1908〜51年)の「浦上燔祭説」を取り上げ、禁教下の潜伏と迫害の延長線上に原爆を意味づける言説を、文字記録の変遷を基に批判し、注目を集めた。発表内容の一部を紹介する。

「原爆は神の摂理」という「浦上燔祭説」は数多くの疑問や批判があり、複数の信仰上の問題をはらんでいる。「犠牲をささげて神におわび」せねば戦争を終わらせることができなかつたのは、「人間の罪はキリストが既にあがなっている」とする新約聖書の考え方と矛盾する。「浦上の被爆者だけが犠牲としてふさわしい存在だった」という主張も、「浦上こそ特別」という選良意識があり、「他者を愛せよ」というキリスト教の隣人愛の精神とも矛盾する。浦上の特権意識とともに、「信仰と潜伏、迫害の苦勞の

## 「信仰、迫害と原爆 連続性ない」

延長線上に、殉教としての原爆がある」とした考えが流通している。しかし、かくれキリシタン信仰が本来のキリスト教と異なる性格を持つという近年の研究は、「浦上四番崩れ」を除き「信仰と迫害の連続性が認められない」と明らかになっている。

例えば、宮崎賢太郎長崎純心大教授の著書「カクレキリシタンの実像」(2014年刊)では「かくれキリシタンは日本の民俗宗教」「棄教しなかつたのは仲間はずれを恐れた」と指摘。大橋幸泰氏の「潜伏キリシタン」(同)でも「表面的に模範的な農民で、異宗を疑われても害にならず」とある。

しかし、長崎市出身の浦川和二郎司祭(1887〜1955年)の著書を追うと、「400年迫害された浦上キリシ

### 恵泉女学園大・篠崎教授



「浦上五番崩れ」としての原爆」と題し発表した篠崎美生子・恵泉女学園大教授  
8日、長崎大

## 永井隆の「浦上燔祭説」批判

「日本公教会の復活(前篇)」(1915年)では名前しか記されていない殉教者が、12年後には自分を捕らえに来た「役人に新米の飯をふるまい、草履を与えた」と理想的なキリシタンに書き換えられている。「浦上四番崩れの『旅』から戻ったキリシタンは、フランス貴族出身の宣教師ド・ロ神父の助力で立派に復興した」ともする。

「最後の迫害と自由獲得が浦上四番崩れ」とした浦川の言説の延長線上に、「最後の迫害は原爆で、その結果世界平和が訪れた」という永井の言説が生まれたといえる。いずれも死や苦しみを権威化したいという構造が共通している。さらに永井の「燔祭説」は、被爆したカトリック信徒に愚痴の一つも言わせないよう抑圧した。

本発表の狙いは、死を権威化する代わりに、人々の痛みをないがしろにするシステムが、二度と作動しないように願うから。原爆で傷ついた一人ひとりに人や社会が寄り添えていたら、被爆者の一部が「原爆は神の摂理」という説をよりどころにせず済んだらう。

(まとめ・高比良由紀)